

第9回 今後の県立高校の在り方検討委員会 議事録

日 時 平成29年2月16日（木）

10：00～12：20

場 所 あすてらす 特別会議室

1 会長あいさつ

皆さん、おはようございます。

昨日はお疲れさまでした。飯南高校には事務局も含めて10名の方々にお出かけいただき、きょうは委員としてはそのうち4名の方にお出かけをいただいております。島根中央高校には、事務局も含めて9人の方々にお出かけいただき、委員としては、そのうち3人の方々に参加していただき、けさから、吉永委員に加わっていただいております。

きょうは8人ということになりますが、きのうの視察の結果を踏まえ、さまざまお感じになったことを持ち出して、今後の島根県の高校教育を考えていくのに必要なヒントをみんなで集めてみたいと思っています。やはり現場を見るということは大事なことです。特に高校生の感じているところを伺うことによって、さまざま得られたところがあるのではないかなと思っています。その辺を交流しながら、今後の議論のポイントについて整理をしたいと思っています。

ちょうど数日前に、次期学習指導要領のパブリックコメントが開始されましたので、その全容について広く知られるところになっております。そのことも踏まえながら、議論をしていきたいと思っています。こうした状況を受けて、来年度に向けての論点整理ができればいいかなと考えているところです。限られた時間ですが、少しいつもととは違った雰囲気の中で会を進めたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

2 議事

【議題1 意見交換】

○委員

飯南高校へ行かせていただいたが、一番は、現場の生の声が聞けるという機会を与えていただき、本当にありがたかった。

一番印象に残ったことを申し上げますと、飯南高校は、やはり学校と地域の連携がもう抜群にとれている、すごくつながりがあるというのが一番の印象である。高校と地域が同じ目的

に向かって、同じ方向に向かってみんなが進んでいる、連携をとっている。その姿が明確になっているので、生徒の意見を聞いたときも、同じような目的、同じことがちゃんと言えている。いっぱい課題を聞くのかと思っていたが、その姿がとにかく衝撃で、本当に感動した。

あと幾つかポイントがあるが、1つはコーディネーターのバランスがとれていると思った。例えば3名の魅力化コーディネーターがいて、1名は飯南高校OBで町役場の職員、あと2人は県外から来た魅力化コーディネーター、1人は男性、1人は女性で、バランスがよく、県外の若い魅力化コーディネーター2名は、生徒とすごく密であることが伝わる。でも、それだけでは町内の方との連携とか、学校との連携をとるのは難しいが、見事にもう一人の町役場にお勤めの飯南高校OBが上手に取りまとめをされている。その3人のバランスがすごくよく、コーディネーター、学校、地域と本当に連携がとれていることをすごく感じた。

あと、校長先生の話の中で印象に残ったことが幾つかあるが、一つはキャリア教育がきちんとなされていること、地域との連携がうまくとれていること。キャリア教育の部分ですばらしいと思ったのは、飯南型キャリア教育をきちんとなさっている。地元の課題を明確化するために、飯南型キャリア教育と名前をつけて、生命地域学という授業を持っている。また、生命地域ラボというクラブ活動も平成25年度から始まっていた。生徒に聞いても飯南町の課題がすごくわかった。こういうことが課題だから、私たちはこういうことをしたいと思うことが、その生命地域学というキャリア教育、飯南型キャリア教育があるからこそ課題が見えて、生徒が知ろうとする、学ぼうとしているということがとても明確化されていて、実践されているところがすばらしいと思った。

あと地域とのかかわりで勉強になったのは、寮の嘱託舎監制度があるということや、町営塾があるということ。3つ目は、ケーブルテレビを活用していること。飯南町の多くの世帯が見ているケーブルテレビで、2カ月に1回定期的に飯南高校の特集を放映し、学校のことを上手に発信し、それを地域の方はいつも見る、楽しみにしている。飯南高校の生徒を応援しようという気持ちが、そのケーブルテレビの発信から芽生えてくる。そのことで生徒が地域に出たときに気軽に声をかける、生徒と交わる、その仕組みが上手にできている。生徒に飯南高校の良いところは何かと聞くと、人との距離感がすごく良い、地域の方があたたかいと言っていた。こういうケーブルテレビだとかさまざまな取組がうまく活きていて、町内の方との交流が生まれ、お互い良い距離感で歩めている。私は松江市内に住んでいるが、ここまで高校生と地域の方がうまく交わることができるかと思うと、本当に飯南町の取組はすばらしいと思った。

最後に、生徒の発言ですごく印象的なことがあった。将来、何になりたいかという話をしている中で、生徒の一人がこう言いました、「人にかかわる仕事がしたい」。何故かと聞くと、「魅力化コーディネーターがすごく楽しそうに仕事をしているから、私たちもこんな大人になりたいと思いました」と言ってくれた。それが私の中で響いた。私たちは本当に生徒がなりたいたい大人の姿を見せることがすごく大事なのだということを、その生徒から教えてもらった。人とのかかわり、地域とのかかわり、学校、地域の連携がとれること、同じ目標に向かうことが、子供たちも同じ方向に向かわせることにつながるのだということを実感した。

○委員

学校視察、それから情報交換の場で、何度もキーワードとして聞いたのが、地域に学校がない、そういうところには定住がない、医療と教育、その充実がないところに人は来ないという言葉だった。町長の言葉にもあったし、校長の言葉にもあったが、やはりそこにはいろいろな危機感と強い思いを持っていることがひしひしと伝わってきた。それは島根県の多くの地域が抱えているものではないかと感じた。

その上で、飯南高校と飯南町の取組は、地域と高校が一つになって、同じベクトルのもとで飯南高校をバックアップしている、飯南高校の教育を進めているところを強く感じた。やはりその地域に必要な人材を育てていくことが、私の住む地域でもこれから絶対必要だと強く感じるが、ああいった思いの中で育つ生徒には、地域の力というか魅力が伝わっていることも、生徒の言葉からも何となく感じることができ、いろいろな思いを持って聞かせていただいた。

2つ目に気がついたことは、ICTをうまく活用していることがよくわかったが、小学校も中学校も同じように活用していることだった。今後、小さな地域で生徒を育てていくには、大きな魅力はあるものの、場を広げることも必要であり、そういった機器を使うことで、いろいろな可能性を加味していくことができるのではないかと感じた。飯南町のあの雪深い中で、いろいろ苦しい面、厳しい面もありながら、生徒にいろいろな教育の場をつくっているのだと感じた。

それから、生徒が地域に出ていく機会を積極的につくっていて、高校だけの取組ではなく、地域の方がその目指すところをきちんとつかんで、いろいろな形でバックアップし、生徒を迎え入れる、自分たちの地域のことを伝える、課題も伝える、魅力も伝えるという、そういうことができていると感じた。生命地域学ということも、初めて耳にしたが、その中で地域を幸福にするというテーマを持って、ことしは取り組んでいるとのことだったが、そういう

テーマがつけられることはすてきなことだと思って聞かせていただいた。

○肥後会長

情報として、島根中央高校は30%前後が県外から来ている。県内も含めて90校くらいの中学校から来ているという現状だったが、飯南高校は、県外、県内の生徒の状況はどうか。

○事務局

現在、21名の県外生が在籍しており、生徒数は201名なので、ほぼ10%である。

○委員

飯南高校の取組に限定して感想を言うと、まず一つは、学校と行政、県あるいは飯南町との連携、協力体制が大変とれている。町は、飯南町から教育の灯、高校の灯を消してはいけないという、町長を初め、熱い思いがいろいろな形で展開されていると思ったし、実際に寮を見たが、大変立派な寮を県も建てていた。飯南高校の先生、職員と魅力化コーディネーター、学校には町の職員の方を含めて3人のコーディネーター、それから公営塾にも1人コーディネーターがいるということだったが、コミュニケーションというか連携が大変とれていた。魅力化コーディネーターが全ての学校に入っているわけではなく、また、県立の先生は転勤等もあるが、先生との立ち位置というか連携の仕方でいろいろ工夫もされている部分もあると思うが、大変うまくいっていた。また、一番肝心な生徒とコーディネーターのコミュニケーションがとれていると感じた。組織レベルでも県や町、それから、人レベルでも教員とコーディネーター、行政との連携がうまくいっていることが、飯南高校が、今、注目されている1つの大きな要因ではないかと思った。

もう一つ、別の観点でいうと、飯南高校は町内の2つの中学校と連携し、中高一貫教育をされている。さきほど県外生が約10%という話があったが、中高一貫とそれ以外の対象の生徒、どのようにその辺をうまく活性化していくかということが、これからの課題であると言っていたが、それをうまい形で取り組んでいけばさらに魅力的になるのではないかと感じた。

県外生について、遠くは埼玉とか千葉、それから西だと九州からも来ているが、いろいろな生徒が入ってきて、お互いに刺激し合うという環境があり、幅広く生徒が来るということは、やはり魅力がある教育をされているのだと感じた。

○肥後会長

県外から来るときのアクセスについて、情報発信を個人的に手繰って来るのか、それとも説明会に出かけてとか、どういうきっかけで来ているのか。

○委員

私が聞いたのは、県が取り組んでいるU・Iターンフェアなどの県外説明会、あと中学生を対象にしたサマーツアーなどいろいろな媒体で案内されているようだ。

○肥後会長

島根中央高校は、一つは野球部の監督が魅力で来るというルートが大きいようだ。

もう一つは川本町出身のOBが関東で塾をやっていて、その塾からの経路で、人数としてはそれほど多くはないにせよ、継続的に来ていた。そういう特定のルートがある場合もある。もちろん多くは個別に来るが、そういうまとまったルートが幾つかはあると感じた。

○委員

飯南高校には連携している中学校が2校あるが、この中学生の数が20年前に比べると半減している状況があり、この少なくなっているところを町外生あるいは県外生で補って定員を確保していくところが基本だと思っている。

しかし、町内の中学校のこれからの入学者予想を見ていくと、平成35年くらいまではなんとか維持できるが、それ以降、数が減っていく見通しであり、そうなる町内出身の生徒と町外・県外出身の生徒の割合は、今、ほぼ1対1の状況だが、これが崩れてきて、町外・県外が多くなってくる。そのときに、町内の生徒を育てるという視点は重要なので、ややそこが薄れているところを反省し、やはり町内生徒への目の向け方を考えていかななくてはならないと言っていたが、定員を維持しつつ町内生徒をどう育てていくかというあたりが、今後の課題になっていくのではないかと校長が言っていた。

皆さん言っていたが、学校がやろうとしていることと町の方針、それから、生徒がそれをどう受けとめていくか、そのずれがないのかを聞き取ろうと思い、さまざまな質問を投げかけたが、ここは三方一致していて、特に自立する力ということを校長が言っていたが、生徒の言葉からも、自分はそういう方向へ向かっている、寮生活を送りながら自立する方向に向かっていると思っているという言葉があり、いろいろな人が、生徒も町の人も、いろいろな人とのかわりがあり、町内のみでは体験できないような情報が自分の中に取り込まれていく、「多様性ということだね」と言ったら、「はい」と答えていた。そのあたりで、いい流れになっていると感じた。やはり大きいのは、生命地域学という学校設定科目を立ち上げて、それを中心にキャリア教育を展開している。一応形になっているが、これからは系統化していくことが必要だと校長が言っていたが、その中でコーディネーターがきちんと機能していると感じた。

○肥後会長

続いて、島根中央高校の視察報告をお願いしたい。

○委員

まず基本情報だが、普通科が9クラスで、現在生徒が270人在籍し、3割が県外出身の生徒であるところが非常に特徴的だったと思う。

それから普通科だが、3つのコースがあり、文系の人文科学コース、理系の自然科学コース、それから保育、商業、料理、調理とかの資格が取れる地域デザインコースに分かれていた。

特徴としては、先ほども言われたように、野球の良い指導者を頼ってくる生徒がいる。それから、吹奏楽が非常に強いということで、吹奏楽部に入りたいと来て生徒がいるのが特徴であった。在籍者270人のほとんどが部活動に加入し、それぞれ活動しているところも1つの特徴かと思った。

島根中央高校の印象だが、先ほどの飯南高校、中山間地の学校ということでかなり重複しているところがあると感じた。一つは、やはり町、行政と学校が本当に一体となって取り組んでいるということがひしひしと伝わってきた。そこが一番大きなところで、地域が学校を元気にし、学校が地域を元気にしている、そういう相乗効果みたいなものを非常に感じた。話している中で、生徒が町を歩いているだけでありがたいといった話も聞かせていただいた。

中山間地の学校ではあるが、その特性を非常に生かした教育がされていて、あの場所だからできるのだろうという特色を生かした教育がされていると思った。学校の中では、30人学級という小さな学級だが、30人であるがゆえにきめ細かい先生たちのサポートが受けられると話してくれた。そういったところも印象深かった。

それから、県外の生徒が3割いるということでかなり多いが、県外の生徒にしてみればいろいろな動機でこの学校に来ていて、自分を変えたい、新たな挑戦がしてみたいということで、塾の先生からの紹介あるいは川本町の説明会への参加など、そういったきっかけで島根中央高校に来たということだった。それと、生徒にとってはいろいろな言葉が学校の中で飛び交うことで言葉の交流ができ、また、30人学級で非常に人数が少ない中でやっていることで、学年の中だけの仲間ではなくて1年から3年までの、そういった幅の広いところでの仲間、そういった交流もできて非常に楽しく過ごしているという話も聞かせてもらった。

進学も多様に展開されていて、進学については、国立大が10%、私立大が19%、それから短大が8%、就職が3割ぐらいで、進学、就職ともに多様な進路に対してきめ細かい指導、

学習ができるようなシステムができているという印象も受けた。

それから寮について、飯南高校ほど立派な寮ではないかもしれないが、廃校になった小学校を再利用して、2 畳一間の簡易なボックスのようなものをつくって部屋にされていたが、廃校ということで体育館は自由に使えるとか、教室であったところに洗濯機を置き、いろいろな工夫をし、うまく再利用されているという印象を受けた。これも価値観によっては、こんなところではという生徒もいるかもしれないが、そういった体験もできるというのは非常に貴重なことかと思った。

それと、生徒から実際に話を聞いたということは非常に大きかったが、その中で印象的だったのは、良い意味で店も少ない、コンビニも 1 軒しかない、店も飲食店も夜 7 時には閉まってしまう、そういう町だが、物を手に入れることの難しさを学ぶことができた。それから、親のありがたさに気がつくことができたといったところは、非常に印象的だった。また、人数が少ないことで先生からのきめ細かなアドバイスが受けられるといったところも印象的だった。

それから、魅力化コーディネーターが島根中央高校にも 4 人いて、先生をサポートし、貢献していると感じたが、その中の一人が、魅力化とは何かという話の中で、「子供としっかり向き合うことが一番の魅力化ではないか」と言っていた。その背景にはいろいろなことが想像できるが、先生方はいろいろ忙しく、そういう向き合う時間が少ない中で、やはりしっかりと向き合うということが一番ではないかと言っていたが、そのためにコーディネーターも役割を果たしているのだと感じたりもした。

それから地域との交流という面では、やはり教室で学ぶものと、地域に出て地域の人たちと交わる時間、これもつくられていて、そこのメリハリというかバランスが非常によくとられていることが印象的で、そこがまた一つの地域と一体となって生徒も進んでいるところではないかと感じた。

私は少しネガティブな気持ちで最初出掛けたが、帰るときには全然違う印象で、ああ、こんなに良い学校があったのだ、もし自分が高校を目指す時期だったら、もしかしたらここに来ていたかもしれないと思うくらい、そのくらい良い印象を受けたのが正直なところである。

○委員

私も今まで魅力化とか中山間地での取り組み、言葉とか文面で知っているつもりになっていたが、やはり出かけてみて感じたこと、見せてもらったことは本当に財産になった。私もこの寮で生活してみたいとか、高校生活を送ってみたいという気持ちに本当になった。地域

と高校が一緒になっている、それは本当に同じように思ったところである。県立高校と地域がいつからこんなに近くなったのだろう、自分の高校時代と比べて、痛感したところである。

生徒が皆、小規模校の良さということを口々に言っていた。そういう自覚があるのかと思ったが、地域の方たちとの触れ合い、それはもちろんだが、県外から来た生徒が、ここは挑戦できる学校だと思うと発言したので、それはどんなことか、もうここに来る時点で挑戦だったのではないかと思い尋ねたのだが、ここで過ごしていて、先生が、あるいはコーディネーターが何かを新たに始めようとしたときに応援してくれる、それが少人数の良さであると答えたのが印象的だった。とにかく数が少なくなると、そこらあたりがうまくいかないと思っていたのを覆されたような感じで、少ないからこそできる、そういった少人数のよさを生徒が実感し体感している。部活と勉強の両立ができるのもそんな支えがあるからであるとか、地域のまち親がこのように支援してくれるとか、そういったことを生徒が実感している。少人数、小規模の良さを実現しているのだということを私も教えてもらった。

それからもう一つ、コーディネーターの働きとか魅力、それも十分あったが、もう一つ先生がたまたまではあるが、地元の高校出身者で、また母校としての思いであるとか、熱い思いを持って生活していることも特徴的だと思った。

あと、川本町の教育長と話をしたときに、やはり小学校、中学校も含めていろいろな出身の先生もありがたいが、地元出身の先生がだんだん少なくなっているのです、今の小学生、中学生がいずれ母校の先生になる、そういった人も育てたいと言われたことが印象的だった。

「子供は宝だ」と町の人たちが熱く語っていたことを、私は最後、生徒に伝えておけば良かったということが少し心残りである。

それから、先ほど、飯南高校では生命地域学という、テーマを絞り込んだ学問に取り組んでいるとのことだったが、島根中央高校ではふるさと学、それから、コースによってはまちごとキャンパス学習という形での取組が進められている。ただ、私どもの聞き方、質問の仕方が少しぼんやりとしてしまったので、もう少し踏み込んで、具体的な取組を尋ねてみれば良かったと少し反省をしている。

○委員

2つの高校の取組を聞いているだけでとてもうれしくなった。地域の人たちが生徒と一緒に、また、生徒が地域の人たち、先生と一体化、そして、コーディネーターと一体化して、自分たちの生活を成り立てている、目標に向かって頑張っているのがすごく目に見えてうれしかった。

津和野も同じような感じで、コーディネーター、先生、町が一緒になって生徒を育てているのが現状である。だから、そういう学校が増え、いろいろなところでそういう声が聞こえ、それが後の世代に受け継がれて、生徒が育ってくれたらとてもうれしく思う。また、人数が少なくなっても、その中で生徒の心を育てていってもらえたらうれしい。私も実際に生徒の声、生の声を聞いてみたい、また、津和野の生徒の声を、どう思っているのか、聞いてみたくなった。

○肥後会長

きょうの委員会の一つのミッションとしては、地域資源を生かして地域活性化にもつながる島根ならではの高校の魅力化や特色化をどう進めるかという大きな目標があるので、どういところがポイントだったのか、抽象化してみる必要がある。

たたき台として、各委員の話を聞きながら私が感じたポイントが4つあるので、並べてみる。これが結論ということではなく、今からの議論の出発点として4つあげてみたい。

1番目は、地元の人たちに支えられた教育ということ。県立高校を町立高校のような気持ちで地域の皆さんが捉えている。地元の人々に支えられた教育というのが1つ。

2番目が、地域の特性を生かした教育ということ。もちろん普通科高校なので、通常の授業科目などがあるわけで、先ほど出てきた教育課程のバランスが問題になる。キーワードはバランスで、地域の特性を生かした教育、それとバランスをとりながら通常の教科学習をどう進めていくのか、あるいはそれとどう関連させて教科学習を進めていくのか、そういうバランスの問題が出てくるだろうと思う。

3番目が、人との距離感あるいは人間関係を活かした教育ということ。

それから4番目が、生徒としっかり向き合えること。魅力化の本質は、生徒としっかり向き合えることという話があった。そのことによって、何が育つのかについては、生徒がつかんでいるもの、例えば挑戦心や自立心、つまり自分の中に育てるべきものが何かということを生徒自身がわかっていくことである。人としっかり向き合ってぶつけたものが返ってくる、自分の言ったことを受けとめてもらえる、では、こうしたら良いのではないかと、真剣に向き合ってもらえる中で、生徒自身が自分の中にこれ为目标に自分は育とうというものが出てきている、そういう感じを見ることができた。本来、教育とは、そういうべきもの。だけど、ともすると人数が多くなっていくと、一人一人に対してそれができなくなり、生徒が自立心なり自分で目標を持ったり、挑戦したりということが一般的にできなくなりつつあるのではないかと。それがここの高校に来ると見えてくる、そういう感じを生徒と話して持つこと

ができたが、魅力化の本質は、生徒としっかり向き合える、そういう環境なり条件をつくっていくことだと思った。

今、ざっと4つにまとめてみたが、その中に包摂し切れない何かもあるかもしれない。少しその辺をお話いただきたい。

○委員

1つ確認で、2番目に肥後会長が、地域の特性を生かした教育とおっしゃったが、この地域の特性と、学校の特色づくり、学校の特性とが結びつくのか。

○肥後会長

生命科学の話を飯南高校でされ、島根中央高校でも、地域の産品とか地元に出て行って、1週間に1回ふるさとを学ぶというコースをつくっている。地元産、こういう産品が地元でとれると言えることがすごく良いと、県外から来た生徒が言っていたが、そのようなことがあると思った。もちろん地域特性を生かしてどう教育と結びつけて、どうしていくかという問題はあ

○委員

少しつけ加えると、本当にそのとおりだと思っていたのは、私が保護者として子供と向き合うときに、私も仕事をしながら子育てをしてくれているので、やはり自分に余裕がないとちゃんと子供を見てあげられないと感じていて、常に優先順位は子供と思って子育てをしている。今、魅力化というのは生徒としっかり向き合うことという話があって、本当にそういうことで、やはり生徒自身が自分で何をしているときにわくわくするのかに気づけること、それが社会に出てからの生き抜く力、生きる力に結びつくと思っているので、大人は生徒が自分の本質に気づく、挑戦の心を持つ、自立する力をつけるという土台をつくって、向き合っていかなければいけない立場だということを常々保護者の立場としても感じていて、また企業の人間として若い世代と向き合うときにもそう思うので、本当に魅力化というのは生徒としっかり向き合うことだと思った。

この前2月14日に県の総合教育会議が行われたが、会議の中で教育長が魅力化の定義について発言していて、魅力化の定義とは改めて何だろうと思った。今後、魅力化の定義も話しておく必要があると思う。

○肥後会長

先ほど、4番目に生徒自身が教員やコーディネーター、地元の人たちとしっかり向き合う中で、自分の中に育つべきものを、目標を自分が見つけるのだと言ったが、一方で、そうい

うことなしにそれを見つけてきた時代もあったのではないかという気持ちが、私の中に正直ある。逆に、高校生ぐらいになると、しつこくかかわられるのが嫌で、自分のことは自分で探していく時期なのではないかと発達段階的には思えるが、ただ、今の生徒はそうではないかもしれないと考えることもできる。そのあたりを今後考えていかなければいけない。これは、今後、例えば小・中との連携を考えていくときに、そういった議論も切り口になるのではないかと思う。

○委員

地域の特性を活かした教育、キャリア教育、飯南高校では生命地域学だが、単位数でいうと4単位ぐらい、高校が展開している授業の総単位数は学校によって違うが90単位以上あり、その90分の4である。残りの大部分は教科、いわゆる従前の授業を展開している。

とにかく我々は4単位のキャリア教育に目を向けるが、それ以外のいわゆる教科の授業と特色ある部分がどうつながるかというあたりについては、もう一つ見えてないと感じた。校長がキャリア教育の系統化と言っていたことは、まさにそのことではないかと思った。

松江北高校でも、地域にベースを置いた取組をしているが、かなりエネルギーが要る。では、教科とどうつながっていくのかというあたりはまだ見えていない。1つ言えることは、そういった自分たちの手で何かをやるというシーンをつくってやることが、それ以外の教科の学びにも何がしかの影響を及ぼすのではないか。学びの構えというか、私は「とりにいく」という言葉を使っているが、そういう構えが地域活動を通して醸成されるのではないかと考えていて、そこがそれ以外の教科の学びに良い影響を与えるのだと、そういった仮説を持って取り組んでいる。しかし、それは仮説であって、そのとおりとは言えないが、実際どうつながったら良いかというところはまだ見えない段階にあり、これは大きな課題だと思う。

いわゆる学力調査というスコアの部分とどうつながるか。飯南高校の場合、これはある一面かもしれないが、国公立大学への合格者数は、ことしはAO・推薦で今現在9名ということで、あと実際の一般試験で6名ぐらいは通る、15名ぐらいの見通しであると、これは非常に数としては多いと言っていたが、そういったところが一つキャリア教育、生命地域学の中で学んだことが教科の学びにもうまく機能し始めていることの表れなのかとったりするが、そこももう一つ見えないところである。

○肥後会長

今、非常に大事な点を2点言っただき、まとめておく必要があると思ったので、少し話しをさせていただきたい。1点目は次期学習指導要領の1つの大きな項目になっているカ

リキュラム・マネジメントにもつながる話。カリキュラム全体を体系化し、どう関係づけていくか。島根中央高校の場合、例えば数学A、現代社会など通常の科目が並ぶ中、ふるさと学は2コマだけだが、どのくらいの割合かということ以上に、それぞれの科目がどう関係しているのか、どう関連づけていくのか、高校教育の特に弱いところであり、次の教育課程の作り方の一つのポイントになっていくと思う。

それから、もう一つは、要するに教育成果をどう見るかということ。これは、単に今までだとセンター入試の点数ということになるだろうが、それをどう考えるか。きのうも島根中央高校で申し上げたことだが、高校のパンフレットの中に必ずある進路実績のページの内容である。進路実績として国立何パーセント、私立何パーセント、短期大学、専門何パーセントと記載されているが、これを「この高校での教育の実績」と本当に思っていらっしゃるのか？と伺った。これが実績ですと言っている間は、いつまでたってもこれから離れられない。もう少し高校教育の実績というものは、これもあっていいが、これ以外にも示しようがあるのではないか。高校教育の実績をどう示すかということも、今後、高校自体が少し主体的に考えないと、最後はこれでしょうと言われてしまうネタを自分で作っていますよということを上げた。この辺は大学も同じ課題を共有しているのだが、大学教育の成果とは何かと問われたときに一番数字で示しやすいのがこれだから、こうやってしまうのだが、もう少し考えてみるべきところにきているであろう。

同じように考えてみるならば、野球部希望の生徒がたくさん入ってきているが、野球選手に何人なったかが成果なのか。野球をきっかけにここに来たが、それ以外に自分はこんなものを見つけて、こんなものをつかんで社会に出ていきましたという、そのあたりが教育成果ではないか。それをどうとらえて、どう表現するかということをやらないと、この地域の魅力化の成果というものは出しにくい。それを考えてみたいですねという話をした。そのあたりも私たちが今後考えていかなければいけないことかもしれない。なかなか教育の成果というのは何年でどこを示すかというのは難しい。昨日の聴き取りの中で、ある生徒が「自分を変えたいと思ってここに来て、そのことが本当にできているということがすごく良い」と言っていたのが印象的だった。そういうことが、大事な教育目標の一つではないか。

○委員

お父さん、お母さんに自分が変わった姿を見せたいと言っていた。

○肥後会長

そうでした。東京から来ている生徒も、やはりお母さんに反対され、何でそんなところま

で行くのかと言われたが、兄弟がたくさんいて東京でやっているお店の手伝いをするときに、やはり変わった自分を見てほしいと思った、そう言っていた。それは素晴らしい教育目標だし、そのことができるからここに来ているのだということがすごくよくわかった。

だから、そういう意味では私たちが教育成果と思っている以外のものを、生徒がどうつかんでいるのかをうまく表せるような方法を見つけなければいけないと逆に思った。

○委員

今の4つの論点からそれるかもしれないが、少し思い出したことだが、先ほど地域学が90分の4という数字で見るとわずかな数字だが、きのう、町の方とかコーディネーターの話を聞く中で、実体験という言葉が使われていたことが印象的だった。小学生とか中学生の学習の中で、実体験とか五感を使う、そういったことを小さいときはすごく大事にし、だんだんそこから抽象思考に走って、実体験から今度は仮想で動けるようなことを目指していたのかと勝手に思っていたが、そうではなく、実際、この4単位の中で地域の人と直接触れて、今、自分が生きている土台のところに向き合うというのは、そういう意味では実体験という貴重な意味があるということを、話を聞かせてもらう中で思った。そういう意味で、教科の中で実際の生活場面と行き来しながら学びを進める、直接人と触れあうという大事な、そんな意味もあるのかと感じた。

○肥後会長

「直接体験」という言葉は5つ目として入れておいたほうが良いかと思う。大学教育をイメージすると抽象的な記号（言語や数式）やモデルが扱えるようになってところへ向かっていく、それも1つの大事な能力だが、現実の社会で生きていくときに現実に人々とかかわって、現実の問題を解決する力をつけるためには、最後まで直接体験という世界は大切なのだということを言う必要はあるかもしれない。これは地域の魅力を生かした高校教育を考える上での1つのポイントでしょう。

○委員

飯南高校を視察させていただき、ミクロ的な言い方をしたが、一方で、この委員会は今後の県立高校の在り方ということで、やはり県レベルで、今回視察した学校をどう捉えていくのかという視点も必要ではないか。

先ほど肥後会長が言われた4つのポイント、これは全ての高校にもかかわっている部分もあると思うが、それが強いか弱いかという部分はあると思う。昔はここまで県立高校は地域とつながっていなかったのではないかという話があったが、県立ということは、やはり県と

してどういう教育するかということが一つある。少子高齢化、それから人口減の中で地域における高校の価値というのが、特に中山間地域や離島で言われるようになり、町村とのつながりが深くなってきたと思う。県立高校の在り方が変化してきたということは、これは間違いないと思うが、それを島根県の全ての県立高校に当てはめることができるかどうかとは、私は別問題ではないかと思う。

3番目に少人数で人と人の距離感が近い教育とあったが、子供の成長過程の中で、肥後会長も言われたが、成長期にあまり近過ぎてもどうかという部分もあると思うし、島根県内どこの学校もだんだん学級数、生徒数が減ってくる中、では、全部が少人数学級の学校になっていいのかということは、別問題。全体として基本の部分と地域活性化の観点で考える学校、その辺ある程度線引きをしていかなければいけないと思う。

もう一つ高校の魅力化というのは、これはどこの学校も、魅力のない学校よりは魅力のある学校のほうがいいわけであり、これは全ての学校で高校に限らず考えていかなければいけない問題だと思うが、特色化となると、余りそれが全面に出てしまうと、県立であれ市町村立であれ、いわゆる等質性という部分も本来は公教育に、公立学校に求められている部分だと思う。その辺を少し整理して、県立高校の在り方を考えることが必要ではないか。

○肥後会長

すごく大事な点で、公立のバランスということ。全ての高校が同じになるのではなく、地域活性化と結びついた高校、そういう特性を持った高校ともう少し幅広に構えて、普遍的な価値を追求するような高校もやはりなければいけないのではないか。それは教育課程の中身にはね返ってくるので、どういうカリキュラムであるべきかということのバランス、それから、どういうコースを置くべきかということのバランス、そういったことを少し考えていかなければいけないというご指摘だったと思う。

○委員

島根中央高校は島根中央高校なりに良い形でやっている。飯南高校も、非常に良い形で進んでいる。それぞれ、モデルとして進んでいるところもあるが、ある意味中山間地で共通した良いところがあると思う。一方で、都市部は都市部で、少し違うものが当然あって良いと思う。県として平準化するというのは非常に危険だと感じるし、逆にやってはいけないと感じたので、やはり中山間地のやり方、都市部のやり方、それぞれ生かしていくような方向性を作っていく。それが島根らしさということになるのではないか、少しぼんやりとしている

が、何か自分の中で整理ができたと感じた。

その上で県として必要なもの、母体の中で何が必要か、先ほど会長からも言われたが、何のために学ぶのか、こういったところをしっかりと、生徒に伝えていく教育をやっていかなければいけないと思う。

これは1つの例だが、私は数学がとても嫌いだったので、敬遠していたが、社会人になってから、どうしても資格を取る必要があり、数学を学び直す必要があった。高校のときの教科書と参考書を買ってきて、勉強し直したところ、当時分からなかったことが、ああ、そういうことだったのだと気がついた。高校のときに、そういう方向でものに向き合っていたら随分やり方というか、見方というのは変わっていただろうと思った。何でそのときに気がつかなかったのだろうか、今でも記憶に残っている。

今やっている学びが、将来、社会に出たときにどうつながるのか、少しヒントを与えながらやると、自分の学びの目標とか、やっていることの意味が理解できて取り組みやすくなるのではないかと感じているので、何のために学ぶのかをもう少し伝える、そういう教育を目指していく。それが、ひいては学問に対して興味を持つことにつながる。飛躍するが、「社会に出てから3年で離職」という問題も解消されていくのではないかという気がする。形だけで入ってしまうと、現実とのギャップに出会ったときにすぐ負けてしまうことがあるのではないか、そういったところも観点に入れて考えたい。

それと、先ほど少人数とあったが、島根中央高校でいろいろ教室を自由に回らせてもらったときに、先生と1対1で学んでいる生徒がいた。あれは何ですかと訪ねたところ、二次試験が目前なので、1対1で物理の入試対策をしているとのことだった。まさにそういったことが少人数だからできている。自分が高校生の頃、こんな光景はなかったのではないかと思います、そういったこともできている学校だと思った。決して全部を全部30人にする必要はないと思うが、そういう教育が受けられる学校もあっていいのではないかと思った。そこが4番目の生徒としっかり向き合えるというところにもつながってくる。

それで、やはり大事なことは生徒を個にしないことだと思う。個にすることによって、モチベーションが下がり、いろいろ違う方向に行ってしまうことがあると思うので、個にしないことが少人数で実現できているのではないか。答えをすぐに出すのではなく、その答えを導くためのヒントを与える、そんな学校が、現実にあるのだと感じた。

○肥後会長

非常に重要な柱になっていく問題で、一つは教育目標、県全体として高校教育が共有する

べき今後の教育目標とはどのようなものか、これはもちろん国の目標とそんなに大きく違うわけにはいかないが、大きな目標が共有できる部分があるのと同時に、個々の高校の置かれた状況とか特性によって、個別に達成していく目標は違うかもしれない。つまり目標というものが、それぞれの高校によって、何をを目指すのか、言ってみれば何を育てるのか、生徒の側から言えば、ここに来ればどんな自分になれるのかといったような個々の目標まで、一定の階層に分けて考えていく必要があるのではないか。そのやり方によって、例えば大目標は全部共有できるけれども、中ぐらいの目標になると、幾つか共有できるパターンがあるかもしれないし、また、個別になっていくとそれぞれ特色を出していこうと思うと、小さい到達目標みたいなものを持つということになるかもしれない。

もう一つは、そのことと結びついて、それが可能になる教育方法、例えば人数というのは1つの教育方法だが、どういう学級編制がいいのか、どういう個別指導ができるのか、そのための人員配置を考えると、柔軟な教育方法がとれるようなやり方を考えたほうがいいのではないかという提案だったと思う。教育目標の階層化、それと結びついた柔軟な教育方法という主旨の提案だと思う。

○委員

きょう飯南町から大田市に向かう途中、県内には雪国あり、島国ありと、島根県には本当にいろいろな地域があり、そこにいろいろな人々の暮らしがあり、学びがある、そういうことをぼんやり考えていた。話を聞きながら都市部には都市部の教育の形があり、小さな地域にはそこに合った形があるのだと思いつつある。やはり教育の目指すところ、生徒につけてはいけない力というのは大枠が必要だと思うが、今の話にあったように、その地域に合わせた形、人数的なこともそうだが、そういったことをこれからも考えていかないと、島根県自体が恐らく全体的に縮小していく、人が少なくなっていく、地域が力をなくしていくので、いろいろなやり方を模索しながら進んでいく必要があると感じた。

○肥後会長

今の話の中には、魅力化という言葉の意味というかヒントがあって、魅力化というのは、多分ここに来るとほかにはない個性的な教育がある。島根県にはそういう個性的な高校がいろいろあるので、その中にはきっとあなたに合った高校があるということが多分一つの魅力化の意味なのではないか。それは必ずしも中山間地や離島ではないかもしれないが、そういう一つ一つの高校が一定の魅力を、個性的な在り方を発信していけるような体制をつくりましようということが一つだったと思う。

一方で、都市部ではそれができにくいのかもしれないし、ひょっとしたら都市部でしかできないこともあるのかもしれない、その辺をどう考えるか。田舎の高校に行くと少人数だから魅力的にできるし、そうではない、人数のいるところではそれができないという論理もおかしい感じがするし、その辺はどうなのだろうか。

都市部の高校の先生方がいますが、その辺、難しさや目標の持ち方はいかがか。

○委員

クラスの規模でいうと、40人というのは少し多いというのが実感である。では、どれぐらいが良いのか、35人、30人、あまり小さくてもいけない。30人ぐらいかと思う。

○肥後会長

今、人数のことをさらっと言われたが、それは国の縛りがあって、すごく大変ではあるが、国もいわゆるアクティブラーニングの話を本気で進めるのであれば、やはり大人数の教室ではいけないので少人数に分ける必要がある、そうするためには人手が要るがそのあたりを国がどう考えているか、すごく問題である。教員定数の変更を検討しているという話は聞こえてくるが、そのあたりが1つのポイントかと思う。

○委員

細かい入試制度がわからないが飯南高校では県外から来る生徒は、多くが推薦で入学している。推薦で入学するが、飯南高校の場合は夏休みに、生命地域ラボの活動の中で、森の学校サマーツアーを在校生が企画し、それに参加したことが、志望の動機になっている。その経験を通じて、学校の先生もコーディネーターもその中学生を見ていて情報が入ってくる。そうして、飯南高校で取り組んでいる内容と受検を希望する生徒の目指すことをマッチングさせている。入試選抜も多様化する、大学もそうだと思うが、育てながら入学生を受け入れるということも、今後は出てくるのではないか。まさにAO入試とはそういう要素があると思う。カリキュラムの部分も大きいと思うが、いわゆるアドミッションの部分もこれからどうするか、1つの大きな課題ではないかと思う。

○肥後会長

いわゆる育成入試という考え方になるが、大学もそういう考え方でやっていこうと言われていながら、入試の公平性など方法論として難しいところがあり、なかなか進んでない。下手をするとある種の囲い込みになってしまうのだが、マッチングを本当にしていく、自分に合ったところに入って、自分の能力を伸ばせるかを試していく、そういう育成入試の在り方も、1つの検討ポイントではないか。

入試の問題を機に、県内の高校生は地元だから行くという以外にも、本当は志望動機が必要なのかもしれない。地元だからということも大事な動機だが、それ以上にやはり自分に合ったところに行きたいということもあるかもしれない。島根中央高校で、地元で島根中央高校に進学しない人はどういう人ですかと尋ねたところ、高専とか工業とか、そういう地元でない特性のところへ進学するため、地元から出ていくケースが多いということだった。

1つ気になったのは、地元出身の方々が、地元の自分たちが出たこの高校を良いものにしていきたいという熱意でやっているが、地元出身者ばかりで固めるのが良いとは思っていないくて、そこはバランスが大切である。地元愛の強い、地元出身のコーディネーターと他県から来たコーディネーターのバランスがあるように教員のバランスも大事なポイントではないかと思う。

○委員

飯南高校で先生と魅力化コーディネーターに課題があるかと尋ねたところ、3つ挙げられ、1番目が寮生活の今後の指導で自主性を育てるということ、2番目はICTの充実、3番目に他校交流を進めていきたいということだった。その中で、県内で他校交流というのが行われているのか、事例があれば見せていただきたい、もしなければ他県ではこんな交流もしていて、成果があるといった参考資料があればいただきたい。

○肥後会長

ICTと絡めてネット、ウェブ上で話し合いをするといった、海士町の取組事例はある。

○事務局

昨日話があったのは、今、会長が話された、ICTを活用した他校との交流という内容だったので、そういった事例があれば報告したい。

○委員

飯南高校もICTを進められているということだったが、私の中では、隠岐島前高校のように通信技術を使って行うのがICTだと思っているが、飯南高校の状況はどうか。

○委員

各教室に、実物投映機とか黒板に貼り付けるビニールの白板の活用が主だった。

○委員

学習支援ソフトを導入している。海士町では、実際に宮崎県の高校との授業もされているが、空気感も共有できる場所があって、生徒の食いつきも含め非常に教育効果が高いと、副センター長から聞いたことがある。それは隠岐島前高校で行われたものではないかもしれ

ないが、最先端の技術を使った授業が実際に行われている。そこら辺の教育効果も含め興味がある。

○肥後会長

都市部でもそれはできる部分があるかもしれない。島根大学教職大学院でも来年度から月曜日の授業は、鳥取県のサテライトと結び、鳥取の先生は来なくても参加できる形の授業にしようと考えている。

○委員

入学の部分、受け入れの部分だが、大学では今アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを各大学が明確に出すということを聞いているが、高校レベルでも当然必要で、どういう生徒を育てていくのかということを明確にし、その目標に対してどうなったのかということが、今後求められてくると思う。3つのポリシー的なものを、今後の島根の高校、県立高校の在り方として集約するときには、そういう視点も必要かと感じている。

○肥後会長

目標設定の話在先ほどしたが、それに応じて、各高校の目標をどのように個性的に持つか、そのことが当然ながら入試のやり方やアドミッションのやり方に反映されていく。最後には卒業生がどうなったかという成果検証の在り方以上に、それをどう発信していくかが非常に重要なので、そういう目標を設定し、入学者を募集し、その結果を検証しながら発信していく仕組みを作ったほうが良いという、そういう指摘だったと思う。

3 閉会あいさつ（片寄教育監）

肥後会長様初め、委員の皆様方におかれましては、年度末の大変お忙しい中、2日間に渡りご議論いただき、まことにありがとうございました。

私も島根中央高校に同行させていただきましたが、飯南高校を視察された委員の皆様方も含めまして、やはり現地に赴き、現地の声を聞き、生徒の声を聞いたということがあり、きょうの意見交換がかなり深まったという印象を持っております。

今回は年度かわって4月でございます。今年度、整理いただきました論点をさらに深めていただきますようお願い申し上げます。